

2012年11月15日

【 津田塾 】 大学に対する評価結果

相互評価委員 日本女子大学 心理学科 小山高正

【総 評】

F D活動の目的が、学部、大学院ともに学則に記載されている。F D活動を担う組織としては、授業評価の実施、GPA 導入などを教務委員会が主体となっているほか、既存の組織である共通科目委員会、健康余暇科学科目委員会、外国語科目委員会、TECC 運営委員会、多文化・国際協力コース運営委員会、メディアスタディーズ・コース運営委員会、日本語教員養成課程委員会、教職課程委員会、国際交流委員会、さらに各学科の学科会議にて継続的改善に取り組んでいる。大学院は、学長が議長を務める大学委員会に一本化されている。各委員会は、一連のF D活動に加え、シラバスの位置づけの検討を、英語教育においては教育成果の検証が可能なPACE の導入、国際関係学科のカリキュラム改革、CAP 制度の見直し、多人数クラスにおけるC A (Class Assistant)の導入、文学研究科修士課程英語教育研究コースの開設、理学研究科情報科学専攻の設置、などが行ったが、全体としては、F D委員会設置の検討、F D支援費の改善と成果の検証も取り組んだ。

津田塾大学「F D活動」自己点検・評価報告書に記載された上記の活動評価を読み、総じて、教育の質向上に意欲的に取り組む姿勢を感じた。現在、ルーチン化された活動は、教務委員会が担っているようであるが、「予測困難な時代の大学改革」を文部科学省が奨励しようとしている今日、新たなF D活動の提案まで、教務委員会が担うことができるのかについては、早急に検討しなければならない。すでに、2010 年度の認証評価報告書を受けて、F D委員会の設置も考えているようであるが、組織を作ればF Dが進むという保証はなく、委員会設置のメリット・デメリットを十分議論してからでも遅くないのではないかと。むしろ、既存の組織を活用しての全学的F D活動の方が、教員のF Dへの意識を覚醒する上では優れているかも知れない。それぞれの組織がどのように有機的連携をしながら、教育の質向上に対する教員の意識を高めていくかが大切なのではないだろうか。

F D支援費はユニークかつ実質的に職能向上を目指した制度で、高く評価されよう。導入から4年目を迎えている時期なので、その教育的効果について検証することを期待したい。

今回の津田塾大学のF D活動に関する自己点検・評価報告書から、本学のF D活動に対する多大な気づきを頂いたことを感謝申し上げたい。

1. F D活動の目的

(所見)

F D活動の目的が、学部、大学院共に学則に明記されていて、全教職員の知るところとなっており、共有されていることが予想される。この点は評価されるべきことと思われる。一方、この目的や目標がいつ誰によって点検・評価されるのかについても言及が欲しいところである。組織のところで書かれる内容かもしれないが、PDCA のサイクルが回っていることを示すことが常に求められる時代である。

(優れている点)

- ・ F D活動の目的が、学部、大学院共に学則に明記されている。

(努力課題)

・ 報告書の中で、F D活動の目的と、大学の理念、目的 との関連が明示されるとF D活動の目的、目標がより明確になるだろう。

2. F D活動を担う組織

(所見)

大学院のF D活動に関しては、学長をはじめとし、研究科委員長、学長補佐などの教学運営責任者が入った委員会が担っていることから、全学的で、実行力のある組織ができていることが予想される。一方で、学部の取り組みは、教務委員会に任されているので、全学体制になっているのか、決定されたことがどれだけ実行されるのかについて未知の部分もある。授業アンケート、GPA の導入などを提案実施していることは評価されるが、F Dに関するさらに新しい取り組みなどが、教務委員会から提案されていくのかどうかなどが、F D委員会設置を含めて今後検討されるのであろう。語学については、PDCA のサイクルができていることは覗い知ることができたが、他の専門科目、共通科目については、当該委員会だけの点検・評価と改善で十分なのか、今後検討を要するところであらう。

(優れている点)

- ・ 大学院に関しては、学長が議長である大学院委員会に、三研究科委員長、学報補佐などの教学運営責任者もメンバーとして加わり、実行力のある組織によってF Dが運営されている。
- ・ GPA を学部は2008年度から導入している。大学院も2009年度から導入している。
- ・ 英語はTECC 運営委員会によって、他言語は科目コーディネーターによって、教育効果の検証が毎年行われていて、語学の学修活性化が図られている。

(努力課題)

- ・ 現在主としてFD活動を担う教務委員会の役割に関して、現状のFD活動の検証を含めて、十分に検討する。

3. FDの活動状況

(所見)

実質的なFD活動については、英語教育を中心として、授業方法、カリキュラムの見直しが毎年行われ、PDCA サイクルが回っている。学部学科のカリキュラム改革、CAP 制度の見直し、CA導入、大学院専攻の改組・新設など、教育内容の質向上への継続的努力がなされている。一方、それらの活動が、教職員全体にどのように知らされ、共有できているか、さらに学生に説明されているか、については点検が必要であろう。FD支援費という優れた制度が導入され、活発な活動がなされているが、その効果を検証する時期に入っているように思える。FD委員会の設置については、学内で十分な議論が必要であろう。その中で、より良い方法やシステムが発見される可能性もある。

シラバスは、ホームページ上で公開されており、オフィス・アワーについても項目として掲載されていることは評価される。シラバス記載内容の精粗、シラバスと履修要覧の機能の見直しをされるとのことで期待したい。

さらに、教員の国内研修、海外研修なども、「教員の資質の向上を図るための方策」としてFD活動に位置づけても良いのではないかと。

(優れている点)

- ・ 英語教育は、不断の授業方法、カリキュラムの見直しが行われている。
- ・ 多人数クラスにクラスアシスタント(CA)の導入が決定され、教育の質向上が図られている。
- ・ FD支援費が設けられ、毎年優れた研究啓蒙活動に活用されている。
- ・ FD支援費にとどまらず、文科省のGPなどにも申請をし、独自のe-learningプログラムのシステム開発などを行っている(資料15)。

(努力課題)

- ・ 最近3カ年のFD活動の教育効果を検証する。
- ・ FD委員会設置のメリット、デメリットを検討する。

以 上